



## 「第4回東北アジアキリスト教歴史協議会に参加して」

大西晴樹

8月25日から27日まで、韓国ソウルのレキシントンホテルで開催された第4回東北アジアキリスト教歴史協議会に参加しました。この会議には日本・中国・韓国のキリスト教史家が集まり、「キリスト教の世界化と地域化」を主題に研究発表がなされました。

参加者は日本14名、中国（香港）1名、韓国23名が参加し、専門がイギリスの私は、この会議の重要性を感じながらもこれまで参加してこなかったのですが、今回日本側代表荒井献先生（新約学）や中国キリスト教史が専門の渡辺祐子さん（本研究所協力研究員）に促される形でエントリーし、挙句の果てにセッションの司会まで担当する羽目に陥りました。期待された中国からの参加者が少なかった背景には、たとえ学会であろうと中国人がキリスト教の会議に参加するのは、ビザの取得等難しい問題があるようです。しかしながら中国では、有名な大学といえども、かつて宣教師が設立した大学に淵源するものが多いわけですから、大学においてキリスト教史を研究する学者が近年増えており、今後なんとしても中国からの参加者を増やしていく事がこの国際会議の将来を左右しそうです。

ホテルでの会議ですが、主催国韓国キリスト

教の敬虔さを映し出して、朝7時の祈祷集会からはじまります。たとえ夜半まで起きていたとしても7時には会議場にいたってはなりません。ホテルは国会議事堂の建っているヨイド地区にあり、目の前は70万人の教会員を擁するといわれるヨイドの純福音教会です。このホテルは韓国のアパレルメーカーの所有者によって経営されているとのことですが、その篤信の経営者は、アンダーウッド、ハントなど、かつてこの国で伝道した宣教師の名前をブランド名にして成功しており、韓国キリスト教界の多様な面を教えてくれています。そういえば、この国際会議のために、教会の牧師であり実業家である人が祈り、相当な献金をしてくれていることも付け加えておかなければなりません。

さて、肝心の会議ですが、私が司会をしたセッションは2日目の午前中でした。韓国側から2本、日本側から2本の計4本のペーパーが読まれました。韓国側からは、①李象奎高神大学教授「政治と宗教：神社参拝問題とオーストラリア長老派宣教師」、②金興洙牧園大学教授「向こう側からの声：WCC（世界キリスト教教会協議会）と朝鮮戦争」。日本側からは、③李省展恵泉女学園大学教授「帝国内部の帝国：日帝とアメリカ宣教師の関係」、④辻直人明治学院大学歴史資料館研究調査員・本研究所協力研究員「日本における基督教教育同盟会の活動：第10代理事長田川大吉郎の思想について」。①にかんして、日本の植民地統治期に神社参拝に反対した韓国のキリスト者のうち、2000人が投獄、50名が獄中死、200教会が力づくで解散させられたということはすでに承知の事実ですが、この報告では、オーストラリア長老教会の事例が取り上げられました。韓国は長老派伝道の盛んな所で、他にもアメリカ北長老教会、同南長老教会、カナダ長老教会の各宣教師が伝道していましたが、それぞれの宣教師の神社参拝に対する態度や、韓国のキリスト教徒が迫害をつうじて独立を求める愛国心をいかに深めていったのか改めて考えさせられました。②は微妙な問題を含んでいます。それは、韓国キリスト教が

共産主義をどのように認識しているかという点です。この点をめぐって、韓国側内部で意見の相違があり、国連軍の朝鮮戦争参加に反対する共産主義を研究課題に取り上げること自体に対する警戒心が表明されたりしました。日本側のペーパーですが、③は、アメリカ人宣教師は当時、日本の植民地政府と韓国人信徒の間で動揺を示していましたが、植民地支配がいわゆる「武断政治」から「文治政治」に転換するに及んで、植民地政府の宗教政策に期待する文書があったという刺激的なものでした。韓国側から「チャレンジング」という反応以外、司会者の力量のせい、それ以上突っ込んだ議論にはなりません。④は、明治学院の総理でもあった田川大吉郎が15年戦争下で中国人の大量留学生受け入れ計画を練りあげ、上海亡命後は国際大学を構想した点について、韓国側から、それはクリスチャン・ヒューマニズムではなく、日本の植民地化政策と連動していたのではないかと鋭い質問が出されました。

2日目の午後から夜にかけて水源近くの民俗村を訪ねたり、大きな教会のホールで教会青年によるアリランなど韓国民俗舞踊やゲームを楽しんだりした以外、ホテルで3日間伍詒の国際学会でした。閉会礼拝において、本大会委員長で韓国教会史の権威である閔庚培延世大学名誉教授が「会議の終わりは征服の始まりである」という国際エキュメニカル運動の父J. R. モットの有名な言葉を引用していましたが、今後中国も含めて、キリスト教という共有する人間理解をもつ東アジアの歴史研究の推進が、国家の利害やナショナリズムに囚われがちな東アジアの現在を解きほぐす解熱剤になるのではないかと感じながら、羽田に戻ってきました。

(おおにし はるき 所員・経済学部教授)